
そうつまり俺の彼女はオヤジなわけだが

Hz

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そうつまり俺の彼女はオヤジなわけだが

【Nコード】

N2348R

【作者名】

H Z

【あらすじ】

俺の彼女はオヤジなのだが。そうつまり俺の彼女はオヤジなわけだが。なんだかんだ言って俺はコイツのことが好きらしい。……ただ、彼氏の前でスルメをしゃぶりながら太ももをかくのはどうかと思うぞ。

そもそもの始まりは（前書き）

どうも、H Zです。

初めての連載がこんな話とは……と複雑な気持ちです。

ポケットティッシュをもらう時のような、軽い気持ちで読んでください。

そもそもの始まりは

「付き合おっか」

そんなメールで始まったこの関係。

俺、飯田^{いいた}駿介^{しゅんすけ}はいたってフツの高校生だ。大きな失敗も、また大きな成功もなく生きてきた。

人並みに勉強をし、人並みに受験をし、受かった。そして今も人並みの人生を送っている。

ただひとつ。俺は恋愛というものを一切したことがない。高校に入ると周りは、少なくとも一回は付き合ったことのある奴ばかりで、付き合ったことのない奴は俺ともう一人オタクの男子生徒だけだった。

やばい、そう思った俺は彼女を探し始めた。どんなにブスでもいいし、どんなにバカでもいいし、この際どんなガリガリでもデブでもいい。彼女が欲しい。

ヤケになっている俺の前に現れたのが、同じクラスの住倉^{すみくら}菜保^{なほ}だった。

教室で初めて菜保を見た時、俺はまず綺麗な唇に目がいった。菜保の顔はパツと見地味なのだが、唇だけが粘土で形作ったように整っていた。この唇を写真にとってポストカードにして売れば、大儲けできるかもしれないと一瞬思ってしまった。

人によって好みの唇は違うし、俺自身唇フェチというワケではないのだが、熟れた苺のように愛らしいその唇に俺は目が釘付けにな

ってしまった。

面と向かって告白するのは恥ずかしいので、メールアドレスを聞いた次の日、さりげなく付き合わないかとメールしてみた。返事はオーケー。俺はガッツポーズをきめた。

今、真剣に考えてみる。

どんなにブスでもいい、どんなにバカでもいい、どんなにガリガリでも、デブでもいい。とにかく俺は彼女が欲しかった。

そして彼女になった菜保は、思わず目をそむけたくなる程ブスでもなければ、イライラしすぎて胃痛を引き起こすほどバカでもない。骸骨かと間違える程ガリガリでもないし養豚場の豚のようにデブでもない。普通の俺にふさわしい普通の彼女だ。

でも俺は見抜けなかった。しょうがない、高校に入学して三週間くらいで付き合ったのだから情報収集ができなかったのだ。しょうがない。しょうがない。

菜保は俺の親父以上に、オヤジだった。

そもそもの始まりは（後書き）

女の子は可愛らしい、おしとやかなイメージを持たれます。私自身、女の子は花のようなものだと思っていました。

でも気づいたんです。

女の子だって、人間なのです。

オイそこ、授業中スルメを食べるな（前書き）

授業中スルメ食べてると先生にバレそうで、チキンな私にはできないです。

オイそこ、授業中スルメを食べるな

先生、斜め前から異臭がします。

入学式から一カ月たってみんなそれなりに打ち解けてきた。メルアドレスもクラス全員分のを手に入れたし、休み時間に絡む仲間もできた。

友達を作るのが得意な俺にとって、みんなと仲良くなるのはさほど難しいことではなかった。

そして、彼女を作るという目標も難なくクリアした。

……………まあ、その彼女が。

「ねえ菜保、スルメ臭いよ。先生にバレるかもしれないからやめとけば？」

「だいじょーぶだいじょーぶ、あの先生花粉症だから、鼻きかないよ」

ああそんな幸せそうな顔でスルメを食むな。そしてくちやくちや音を立てながらスルメを周りの奴に差し出すな。

揺れるポニーテール、長い睫毛……そして芸術的な唇。

入学して数週間はおとなしかった彼女も、一か月たてば御覧の通り。

「あ、駿介も食べるー？ 美味しいよこのスルメ」

「なあ菜保、今授業中だぞ。ノートとらなくていいのか？」

「歴史なんてノートとらなくても大丈夫だよ、聞いとくだけで頭ん中入ってくるし」

こう見えても菜保は頭がいい。テストでは必ず平均点以上をとるし、記憶力もバツグンだ。

「毎日必ず一時間勉強してる俺でも、テストはたまに平均点以下をとってしまいうし、記憶力もそんなにいいとは言えない。なのでそれ以上説得するのは不可能だった。」

ただな、いいか。

高校一年生の春真っ盛りの女子生徒がスルメをくちやくちや噛むのはどうかと思うぞ。

「あのな菜保、お前は女の子なんだ。自覚しろ」

「えーいいじゃん。女の子だってたまにはオヤジになりたいんですーっ」

「たまにじゃないだろ、いつもいつもだろーが」

どうしたら、こうなった。

まるでオヤジが留年しているみたいじゃないか。

「ハイそこー、ズビズビ。しゃべらないでー……ズビズビ、くださいズビズビ」

歴史担当の先生は花粉症が酷いらしくしょっちゅう鼻をすすっている。おかげで注意も注意に聞こえない。

……それにしてもこのスルメの匂いに気付かないって、すごいよな。

「匂いひどいから、片づけろ。な？」

「んー……わかった。さすがに飽きてきたし」

真剣に説得したら菜保も分かってくれたようだ。しぶしぶスルメを袋に戻し、鞆に直した。

そして暑いからと言って許可をもらい、窓も空けた。これで換気もできる。

そして数分後。

「ねえ菜保、カルパス臭いよー。先生にバレるかもしれないからやめとけば？」

「んー……コレにコーラあったら最高なんだけどなー。カルパスおつまみにしてコーラ飲むと、ほんとーにおいしいんだ」

先生、席替え希望していいですか。

オイそこ、授業中スルメを食べるな（後書き）

昔カルパスが大好物で近所の駄菓子屋に行ってはよく買っていました。

公園で友達とカルパスパーティー……懐かしいです。

放課後デートってこんなもの？（前書き）

一度でいいからやってみたいな放課後デート。

放課後デートってこんなもの？

一応俺と菜保なほは付き合っている。

部活動ができなくなった時や暇な時は、恋人同士らしく一緒に喫茶店でだらだら話をしたり、ゲーセンでプリクラを撮ることが多い。

菜保は女らしい表情やしぐさを見せることはないし、一緒にいる俺も呆れることのほうが圧倒的に多いのだが、なんだろうか。

小学校の夏休みの宿題で出された朝顔の観察日記。

手渡された観察レポートに、どんな些細な変化も真面目に書きとめていた俺にとって、今までに出会ったことの無いタイプの人間と一緒にいるのはいろんな発見があって楽しい。

そんなことを言ったら菜保は朝顔と同じレベルかと聞かれそうなのだが、そこは違うと言っておこう。一応、俺と菜保は付き合っている。恋人同士だ。

……………その恋人同士の今日のデートが。

「うーっ……………つああああ、きく、そこ、イイよ」

待て、勘違いするな。

「こうっ……………か？　オイそれから誤解されるような声出すんじゃないよ」

「だってすごく腰痛かったんだもん。肩もすごくこってるんだもん。そして駿介しゅんすけすごく上手なんだもん」

「おまつ、女子高生なんだぞ若いんだぞ。なのに腰痛いとか言っ

んじゃねーぞ」

「女子高生だってオッサンになりたいんですーっ。女の子に夢見ちゃダメなのよ、絶望するわよ」

「さりげなく太ももかくな」

職員会議で部活動が無い今、グラウンドにある野球部のベンチは誰も人がいなかった。

今日の授業が全部終わると、菜保はいそいそと俺のところへ来て言ったのだ。「マッサージしてくんない？ 最近腰と肩がこっちゃってさあ」

爽やかな春の午後三時、若葉がきらきらと光る。グラウンドには人っ子一人すらいなくて、時々舞い降りてきた鳥が囀る。

和やかな日。公園デートでもしたら最高だろうなと思っている俺の、目の前にだらんと横たわる菜保。

こいつはセーラー服を着るべきじゃない。というかこんな奴にセーラー服は着てほしくない。なぜなら俺はセーラー服萌えだからさ。

「最近夜パソコンばっかしだからなー、やっぱりあの椅子がダメなんだわ。お尻も痛くなってきたし」

「あの真ん中に穴あいてるクッション置いたらどーだ？ 痔にもならないですむみたいだぞ」

「むう、あたしは痔なんかじゃありません。膀胱炎です」

ああもうなんてカオスなアンダートーク。

「あのね、膀胱炎ってすごく痛い。抗生物質飲んでるんだけどそろそろ治りそう」

「フツー彼氏、ってか男に膀胱炎カミングアウトするか？」

「うん。あたしトイレから出て、最初にお兄ちゃんにカミングアウト」

トしたよ。わあどうしようお兄ちゃん、あたし一步大人に近づいたよ。って」

「……………それを聞いて兄貴は？」

「赤飯炊かなきゃな、って言ってた」

「それ絶対勘違いしてるから！」

まあ早く膀胱炎が治ってくればいいな。最近菜保が友達とトイレから帰ってくるたびに、オオカミのように低い声で呻いていたのはそのせいだろうし。

「あつ、首もお願い。とくにココ！ このへん！」

「はいはい……………ったく、うちの親父でもこんなことさせねーよ」

「え、駿介の家ではこんなことしないの？」

「ああ。どっかこったら、マッサージの店的なモノに行ったりしてるみたいで。そっちのほうがプロがやってくれるから気持ちいいんだとさ」

「エステ？」

「んなわけあるか」

ツツこみをいれながらもきちんと揉む俺、偉い。

それにしても本当にこっている。パンの生地を揉むような感じじやなくて陶芸用の土を揉むような、とにかく硬い。

菜保、勉強してるのか。学校ではだらけている分、きちんと家で努力する奴だからな。この前学校休んでノート見せてもらった時、びっしり細かいところまでポイントが書きこまれていてびっくりした。

「とにかく菜保、あんまり無理すんなよ。俺も疲れてきたし、今日はここまでだけど、またやってやるからいつでも言えよ。……腕の筋トレにもなるしな」

大切な彼女だ。俺は彼氏だ。優しい言葉のひとつやふたつかけてやるさ。

「んじゃあさ、次、足つぼやって」

「……………は？」

「もう身体じゅうガタガタなの。ああ、せんべい持ってる？ 足つぼされながらせんべいかじったりやってみたかったんだよねー」

「ちよつと待て、俺疲れてるんだが？ 聞いてなかったのか？」

待ってくれ。

いくら女の身体でもガチガチにこっている。揉んでいる俺としてはそろそろ腕がつりそうなのだが。

「腕の筋トレになるでしょ？ ね？ お願い」

語尾にハートをつけて頼まれる。そしてごろんと仰向けになって足をつきだした。今隣に焼酎を並べたらコイツは完全に酔っぱらいのオッサンと化すだろう。

「ちよつと痛いくらいが気持ちいいから、よろしくね」

「なあ菜保、さっきから気になってたんだが」

パンツ見えてるんだけど？

放課後デートってこんなもの？（後書き）

萌えるパンツの代表として白地に水色のボーダーがありますけど、あのボーダーをタテ縞にしたら、あっという間にオッサンになると
思いませんか？

まさかこんな時間に、こんな場所で（前書き）

二十四時間営業のコンビニ。なんでも売ってるコンビニ。
でも深夜に行ったことが一度もない。

まさかこんな時間に、こんな場所で

深夜、腹の虫が咆哮して目が覚めた。

その日、俺は二百円をかけてガチの鬼ごっこをやっていた。一日中逃げっぱなし、追いかけてっぱなしで酷く疲れていた。

しかも結果は惨敗で、俺は二百円をソイツに支払うことになったのだから心の疲労もハンパなかった。

ふて寝。家に帰った瞬間ベッドに倒れこみ、そのまま寝た。

俺が寝ている間、家族はとくに夕食を済ませてしまったらしい。途中名前を呼ばれて風呂に入ったのはいいが、風呂から上がった瞬間すぐにまたベッドに倒れ伏した。

「なんであの時、晩メシ食ったかなかったんだーっ……」

ぐぎゅるる。腹が何とも切ない音をたてている。

空腹すぎて吐いた息は胃液の匂いがする。これは本当の本当の空腹だ。高校一年生で育ち盛りの俺にこの空腹は耐えられない。

ケータイを開いて時間を確かめる。夜中の一時。朝ごはんまでオアズケとなるとどうもきつい。

「そうだ」

こんな時に役に立つ場所がある。

二十四時間営業。食べ物も雑貨もある夢のような場所。

「コンビニ行こ」

家族を起こさないようにジャージに着替えて、静かに靴を履いて、玄関の扉を開けた。

空も町も真っ暗で、唯一星と月だけがきらきら光っていた。明日は綺麗な晴れになるだろうと思いながら深夜の道を歩くのは新鮮だった。

コンビニは家から歩いて6分ほどだ。ぎゅっとサイフを握りしめる。

ぐぎゅるる。腹の虫の、催促の声が聞こえた。

「……………」

今俺はふたつのことにツツこみたい。

ひとつは深夜のコンビニに、灰色のスウェットを着た（しかも中につけていると思われる腹巻きがくつきり浮いている）菜保なほがいること。

もうひとつ。

菜保が成人雑誌売りの前を何度も行き来していることだ。

「……………」

「おおっ、結構過激すなあ。どれどれ」

「……………」

「なるほど。今月号はOLさん特集か。いいねいいねー」

……いや、俺もやるよ。やるさ。

俺は成人雑誌を堂々と読めるような歳になってないし、何より羞恥心が好奇心を上回る。

でも成人雑誌コーナーの前を行き来してチラチラ横目で特集を確

かめることがある。ほうほうなるほど、今月はアレがどーのこーのなのか。うししし。

そこは男子高校生の野郎だから許してくれよ。

「とうとうあのコがねえ。まあグラビアなんてそんなもんだわねー」

菜保。もうやめてくれ。

お前は花の女子高生なんだからよ。いや、本気で。

「菜保」

「うわっ、びっくりした。駿介しゅんすけなんでこんなところにいるの？」

「腹が減ったから食料をな、調達しに来たんだ。……あのな、菜保。さっきから見てたんだが、なんでその……」

「エロ本コーナーの前を何度も行き来しているかって？」

「そうだ！ 自覚があるんならやめとけよ。しかも、今何時だと思ってるんだ？ 変な事件に巻き込まれたりしたらどーすんだよ。お前の家からこのコンビニまで5分以上かかるんだからよ」

「だいじょーぶ。腹巻きたあたしは無敵」

「もう腹巻きしなくても十分無敵だとは思っけどさ……」

「あのね、深夜突然『しゃがめ！ 耳かきくん』の新刊が読みたくて、買いに来たんだけど、寝ぼけてたみたいでさ、サイフ忘れて買えないの」

「何だその変な題名の漫画」

「いつかしゃがむことが夢の耳かきくんが、仲間のハンガーくんとかトイレットパーちゃんと一緒にかがもうと努力する感動物語だよ」

「……………それ、泣けるか？」

「全あたしが、泣いた」

つまり菜保しか泣いていない。

最近菜保がクラスの子にお勧めしている漫画とはこのことか。今度貸してもらおう。ひょっとしたら実は意外と泣ける話かもしれないし。

「でさ、あたし新刊買うお金ないの」

「すいませーん、アメリカンドック三本くださーい」

「あのね、すごくすごく読みたいの」

菜保の声は聞こえない。聞こえない。アメリカンドックが入った容器を受け取り、店員に三百九十円を渡す。レシートはいりません、を言うのは忘れずに。

腹の虫はもう疲れ果てているようだ。人間は空腹が過ぎると今度は無感覚になっていく。これがそうなのか。身体がふわふわする。面白い。

「お願いいい！！ 買って！」

「知らん！ 今度また来て買えばいいだろうが！」

「だって今読みたいの！ あのね、ここの漫画立ち読み防止のためにラップみたいなんしてあって、読めないの！ お願い！」

店の外へ出ようとした俺の首を、菜保がすごい勢いで絞めた。一瞬色とりどりの花が咲く花畑と、澄んだ水が流れている一本の川が見えた。危ない危ない。

「おいコラお前彼氏殺そうとすんじゃないやねえよ！」

「駿介が買ってくれないんだもん！　あああたし読みたくて読みたくて死んじやいそう！」

「とか言って金返すの忘れるだろ！？　そうだルーズリーフも確か十枚以上やったのに、未だに返してもらってねーし！」

「ルーズリーフの十枚や百枚、男がネチネチ言っでんじやない！　読みたいよ！　読みたいよ！　読みたいよ！」

ええい。鬱陶しい。

「それじゃあこうしよう。あの成人雑誌コーナーの前に仁王立ちして、二十秒間直視できたら、買ってやる」

「ほんと！？」

そう言った途端。ピピピピと音が鳴って、自動ドアが静かに開いた。

大学生の男が五、六人ほどにぎやかに入ってきた。先ほどまで飲んでいたのだろうか。顔がうつすら赤く、声にはハリが無いが、やけにデカイ。

男はみんなそれなりに整った顔立ちだ。額にリア充と書いたらもう完璧だ。

その雰囲気圧倒された俺はさりげなく通路の端により、邪魔にならないようにした。

「菜保、やるのは後でいいから」

いくら菜保と言えど年頃の女の子だ。大学生のお兄さんがたくさんいる中、さっきのミッションは苦しいものがあるだろう。俺でもあのコーナーの前で三秒以上立ち尽くすことができない。

むしろ漫画は、菜保がサイフを忘れたと言った時点で、買ってやるつもりでいた。

一緒にアイスの棚でも見るかと、菜保の方向を見た。

絶句した。

「むう………」

コイツ、やってやがる。

成人雑誌のコーナーの真ん前、しかもちゃんと仁王立ちで。エロ本を、直視、して、いる。

ちょっと奥さん聞きました!? ピチピチの女子高生がエロ本を直視していらっしやるわよ! しかも仁王立ちで。もうそれは教科書のお手本のような美しい仁王立ちで。

「あと十五秒かぁ……よし、やってやろうじゃないの。見つめ合ってやろうじゃないの」

「もういい! もういいから!」

アメリカンドックの容器を脇に挟んで、菜保の首根っこをむんずと掴み、空いた手で『しゃがめ! 耳かきくん』の新作(新作と示す紙が貼ってあった)をひつつかみ、レジで会計をすませた。

酔いがすっかりさめた顔で、大学生のリア充兄さん方がこちらを見ている。頭がパニックなまま、店員の「ありがとうございます」の声を背中で受け止め、店の外に出た。

菜保はキョトンとした顔で俺と漫画を交互に見ている。

「え、どうして？ まだ二十秒たってなかったよ」

「そんなことはいいから！ どーしてだ、お前には羞恥心ってもんがないのか？」

「ちっちゃっ、甘いぜ兄ちゃん。こうして子供は、大人になっていくモンなんだよ」

「えっ、ちょ、おま、キャラ変わってるから！」

「ありがとね。駿介」

漫画をぎゅっと胸に抱きかかえて微笑まれる。その頬笑みだけで、俺の腹は満たされたようだった。愛しいと絶叫するのをこらえながら、俺は脇に挟んでいたアメリカンドックの輪ゴムをといた。

三本あるうちの一本を、菜保に渡す。

「食うか？」

「おっ、ありがとーね。一緒に食べよ」

目を輝かせて、俺の手からアメリカンドックを受け取り、ぱくっと一口食べた。俺も食べる。一口食べた瞬間、腹の虫が覚醒したのか、無意識のうちに二口、三口と食べていた。

美味しい。

空腹の身体の隅々まで染みわたる美味さだ。たかがコンビニのホットスナックなのに、今の俺には高級フレンチと同じ味がする。

ほくほくが口の中ではじける。そしてほんのりと甘い。ああ、この世にこんな美味しいものがあったとは！

無我夢中で一本食べつくした俺は、最後の一本を食べようと容器に手を伸ばした。

あれ、無いぞ。

三本のうち、一本は俺、もう一本は菜保に渡した。そして残った一本が、ここにあったはずなのに。

「まさか」

「駿介！ アメリカンドックって美味しいね。もつともつと食べた
い」

「……………菜保、それ何本目だ？」

「二本目」

中途半端に満たされた腹はもつともつと食べ物要求し始めた。
サイフからは七枚の円玉がこすれる音しかない。

ぐぎゅるるる。腹が悲鳴を上げている。

菜保は満面の笑みで最後の一口をぺろりと平らげた。

まさかこんな時間に、こんな場所で（後書き）

小学校も卒業するころ、通学路にアッチの本のページがたくさん落ちていたことがあります。

みんなは気味が悪そうに顔をそむけていましたが、私はガン見でした。

この二人だけで四話書けたという奇跡。

せめて電話してから

前編（前書き）

仮病はいけません。

せめて電話してから 前編

「いい気持ちだ」

春の爽やかな風が網戸をすり抜けて髪を撫でた。ぽかぽか陽気が、布団にくるまる俺を柔らかく照らす。

家族のいない日曜日の昼下がり。気楽なごろごろライフを満喫していた。

「春、ああ春！ うーん、これから梅雨がやってくるなんて信じたくない。あのジメジメとした梅雨がやってくるなんて信じたくないぞ俺は」

寝返りをうって抱き枕を抱きしめる。ゴーヤの形をした緑色の抱き枕は、俺が中二のころから世話になっている。

ゴーヤ独特のゴツゴツした皮までキッチンと再現されており、寝転がってコレを背中に当てると、背骨がゴキゴキと音をたててなんとも快感なのだ。

カーテンからは光が差し込んでいる。どこかで子供の笑い声がした。

「ああいい気持ちだ。和やかで、穏やかで、このまま楽園まで行ってしまいそうだ」

「しゅーんすけーっ！」

どこかでNの叫び声がした。いや、聞こえないフリをしよう。

「これからヤツがやってくるなんて信じたくない。あの逞しいオヤジ女子高生がやってくるなんて信じたくないぞ俺は」

「おじゃましまーす」

「ちょおおっ!? マジか、待て、待ってくれ! ってか、鍵は!」

当然だが、まだ高校生の俺達はお互いの合鍵を持っていない。俺が留守番しているのをいいことに、家族は鍵をかけないまま外出してしまったらしい。

「ちくしょお……ああ俺の極楽タイムはこれでおしまいか。でもまだ手はある! どうにかして菜保^{なほ}を帰らせればいいんだ!」

さっきまでグータラしていた割には頭の回転が速い。これが春の力というものか。温かくなると人間、自分自身の潜在能力を発揮できるものなのだろうか。でも今はそんなことどうでもいい。

「アイツが靴を脱いで廊下を通って階段を上がってくるまで……二十秒!」

ぴかん。おおっ、目からビームが出たみたいだ。

俺は光の速度で勉強机の上にあった花粉症用のマスクをかけて、もう四日ほど洗濯していないハンカチを額に当て、そのままベッドに仰向けで寝転んだ。

「もー、呼んでもこないから来ちゃったよ。あのね、スルメいっし

よに食べたいなーって……………どうしたの？ 駿介」

「おお菜保か……俺はどうやら風邪をひいたらしい」

もちろん嘘だ。

口元にはマスク、額には折りたたんだハンカチ、首いっぱいまで布団をかぶってできるだけしんどそうにする。こうしているだけで立派な風邪ひきに見える。そうそう、時々咳をするのも忘れずに。

「ええ駿介、春なのに風邪ひいちゃったの？」

「ああ……もう死にそうに辛いんだ。ゴホゴホ」

「ピンクのマスクかぁ、可愛いねコレ」

実はこのマスク、花粉症の姉ちゃん用なんだ。弟大好きな姉ちゃんは毎日のように俺の部屋に来るのでうっかり置き忘れたのだろう。

「ああ、たまにはピンクもどうかナーって。ほら、春色だろ？ ご、

ゴホゴホ」

「このハンカチ、乾ききってるね」

そりゃあの二十秒で濡らしたら奇跡だろうよ。

「ね、熱がすごくてなあ……。水分が蒸発したんだと思う。ゲホンゲホンゲホン」

「そうなんだ……………。駿介、大丈夫？」

おや。

俺を心配する菜保、案外可愛いじゃないか。

「ああ、大丈夫だ。安静にしておけばすぐよくなると思う」

だからすみやかに帰ってくれ。そう願いをこめていた……だが。

「ねえ駿介、あたしって駿介の彼女だよね？」

「ああ、そうだけど……」

「じゃあ、看病しないよね！　今からおかゆとか作ってあげよっか？　あ、スルメいる？」

え、いや、遠慮します。

固まってしまった俺はその台詞を口に出せなかった。いや、言っただとしても菜保は聞いてはくれないだろう。

さて、どうしたらいいものか。

せめて電話してから

前編（後書き）

続きます。

せめて電話してから

中編（前書き）

おねーちゃんほしー。

せめて電話してから 中編

「るんるんる。うだうだうだーい」

「……なんなんだその歌は。そして菜保、人んちのキッチン使って何をやってる？」

「いまのをイングリッシュで？」

「What are you doing?」

「あいあむ、くっきんぐ」

リスニングのお手本になりそうなくらい完璧な英語を披露したのにジャパニーズイングリッシュで返してきやがった。

見ためは風邪っぴきでも、本当は漁に出掛けられそうなくらい元気が有り余っている俺。看病すると張り切っている菜保なほが心配で見に来てしまったのだ。

おっと、勘違いしないでほしい。菜保が手を切らないか、ヤケドをしないか……そんな心配をしているんじゃない。毎日姉ちゃんが掃除していつもピカピカの台所が、菜保の手によってヘドロの海と化さないか、それが心配なのだ。

以前ハムスターを飼っていた時、ペットボトルに入れていたエサのヒマワリの種に蛾の幼虫が湧いたことがあった。

おぞましい生物の巣窟と化したペットボトルを見た姉ちゃんは絶叫し、しばらく俺と一緒にでないと眠れなかった。ひとりだと、夢にうにゆうにゆとくねる蛾の幼虫が出てきてしまうらしい。

あの姉ちゃんの添い寝は二度とゴメンだ。姉ちゃんだってトラウマを増やしたくはないだろう。

菜保をちゃんと見張っておかなければ。

「ねえ駿介^{しゅんすけ}」。なんだか火がすごいんだけどー」

「いきなりか！ 俺だってコンロからこんなデカイ火柱が上がるトコ見たことねえよ！ 怖ええ……近づきたくねえ」

さあ皆様ご覧あれ。燃え盛るこの火の中を、ライオンが通り抜けてみせましょう。……サーカスのワンシーンのようだ。業火が、家庭用コンロからすさまじい音を立てている。

近くにあったまごの手でどうにかしてつまみを弄り、火はどうにかおさまった。

「じゃあ火使うのはやめよう。やっぱり風邪にはビタミンだね、お野菜とかテキトーに切って……こうして、こうしたら……」

「生！？ 生なんだ」

「なんでも生がイチバン」

「分厚く切った玉ねぎを生で食えと？ かたーいサツマイモを生で食えと？ そしてなんで今の時期ゴーヤがあるんだ！？」

「ゴーヤ、嫌い？」

「いや好きだけど……でも、ゴーヤは生で食えるもんじゃないと思うぞ？」

しぶしぶとゴーヤを冷蔵庫にしまう菜保。春なものになぜゴーヤが家にあったのかは疑問だが、深く考えないでおこう。

改めてシンクに向き合った菜保は分厚い玉ねぎをできるだけ薄く切り始め、サツマイモも細かく切った。たどたどしい手つきで、見ているとハラハラした。

「あ、たんぱく質もとらないとね。なんかあるー？」

「たしか豆腐があったと思うんだけど……」

「わおお。マグロのお刺身はっけーん！ コレをコーラでグイッといくとたまらなくおいしーんだよねー」

「いや、その刺身は昨日の残りで、今日俺が食べるつもりで」

「うほほーい！ なにげにチーズおかきがあるじゃーん。ちょ、駿介の家の冷蔵庫ってすごいね。素晴らしいね」

落ちつけ。

これ以上冷蔵庫をひっかきまわされたらたまらないので、菜保の腕をホールドする。酔っぱらいのオヤジみたいにギャンギャン騒ぐ菜保。オイ、一応俺は風邪っぴき（演技だけどな）なんだぞ。そこ忘れてないか。

「菜保、お前は料理しないほうがいい。俺にとっても、お前にとっても。……それから俺の姉ちゃんにとっても」

「またまたあ。せっかく彼女がゴハン作ってくれるんだよ？ 見ておきなさい！ あたしの華麗な包丁さばきを！ 思わず見とれてしまうようなフライパンさばきを！」

「危なっかしい包丁さばきをか？ サルのほうがまだマシだと思えるほどのフライパンさばきをか？」

「酷いなあ……酷いよ、うん」

「どれくらい酷い？」

「街角で配ってるチラシを受け取ってくれない人みたいに酷い」

……ああ、バイトしてるんだ。ウチの学校バイト禁止だけど。まあ黙っておいてやろう。

「頼む菜保。見ている俺のほうも疲れるんだ。野菜、まだ調理してないから、ビニール袋に入れて冷蔵庫に入れておいてくれ。……俺のほうもあんまり食欲ないんだ。たぶん食べたとしてもすぐ吐いちゃうし」

「あー風邪になると吐いちゃうタイプなんだ駿介って」

「まあ……うん。とりあえずビニール袋に入れて、野菜室にインし
といてくれ」

「あいあいさー」

これくらいはできるらしい。チョコイとビニール袋に野菜を投
下し、冷蔵庫の野菜室に投げ込んだ。バスケの選手がシュートを決
めるみたいに入れたのは褒めにくいけど、大目に見よう。

「菜保、俺によくなってほしかったらスルメを置いて帰ってほしい
んだが……」

「あ、スルメ。そうだスルメいっしょに食べよう！ あとテレビ見
ていい？ 吉本始まるんだよねー」

もう聞いちゃいない。

心底呆れた俺の耳に響いたのは、聞きなれたあの声だった。

「たっだいまあー！」

げ、姉ちゃんだ。

せめて電話してから

中編（後書き）

続く

せめて電話してから 後編(前書き)

久しぶりっ☆

せめて電話してから 後編

「誰かお客さんきてるのー？
駿介^{しゅんすけ}」

まずい。まずいまずい。

姉ちゃんにとっての俺は立派な健康体。菜保^{なほ}にとっての俺は立派な風邪っぴき。矛盾が生じてしまう。演技が、ばれてしまう。

ああどうしよう！ どうしよう！

「あーもしかして彼女？ ワタシにも見せなさいよ。何？ もしかして二人でイチャイチャしてたわけ？」

「あーもしかしてお姉さん？ 駿介、あたしもお姉さんにあいさつしたい。もしかしたらホラ……長い付き合いになるかもしれないでしょ？」

ああどうしよう！ こうしている間にも姉ちゃんは軽やかな足取りで階段を上ってくる。どうしよう、どうしよう！

危険信号が鳴り響く。赤く光るランプが点滅する。頭から湯気が出そうだ。いや、もうでてるかもしれない。

「入るわよー」

「あっ、ハイイ！」

もう、いいや。

「で、駿介はあたしを帰らせようとして嘘をついたのね？」

「よくやったわー駿介。自己防衛ができるなんて、アンタは昔っか

らしっかりした子だったからねえ。お姉ちゃん嬉しい」

「……………チツ、このミルクタンクが。上半身に尻ついてんじやないの？」

「……………調子にのんなよ貧弱小娘。悔しかったらオヤジ臭じゃなくて女のフェロモン出しなさいよ」

「あのーお二人さん？　なんでこんな殺気ムンムンなわけ？」

菜保も姉ちゃんも汚物を見るような眼で互いを睨んでいる。菜保は舌打ちを何度も繰り返し、姉ちゃんは冷ややかな目からビームを出す勢いである。

ああ、俺がいたたまれないじゃないか。イカン、胃が痛くなってきた。

「大体何？　この乳、でかすぎてみつともない。アカたまるんじゃないの？」

「あら、小さい人は羨ましいわあ。だって肩がこらないんだものねえ？」

「駿介と一緒にこれから大きくしていくの。オバハンは黙ってろ」

なあ女って胸で決まるのか？

目の前で繰り広げられる静かな戦いにバクバクと心臓が鳴った。頼むどうか俺に話を振らないでくれ。

「駿介は昔っからお姉ちゃん子だったのよね。ほら覚えてる？　一緒にお風呂入ったじゃない。あの頃頭洗うとき、お湯を頭にかけるたびに泣き喚いてたわよね」

「ねっ、姉ちゃん！　お願いだから風呂とかそっちの話は！」

「怖いテレビ番組見た後とか絶対一緒だったわよねえ。懐かしいわ。でも入らなくなったのは小五のころだから……………ふふ、そう考えたら

駿介も大人になったのね」

「わあああああ!!」

大切なものがガラガラ崩れていく気がした。菜保を見ると、これまたニンマリと嬉しそうに笑っている。

「そーか駿介くんは小学五年生までお姉ちゃんとお風呂に入ってたんだあ」

「菜保! 違う、これはきつと何かの陰謀だ!」

どうかどうかどうか菜保がぼろっと誰かにもらしたりしませんでしたように。

「疲れた……」

うなだれてため息をつく。彼女なんだからと姉ちゃんが言ったので近くまで菜保を送っていくことにしたのだ。なんだかんだ言って人情が厚い姉ちゃんのこと。応援は、してくれているに違いない。

……疲労困憊。本当に熱が出ている感じがする。

「いやー駿介の秘密も知っちゃったし、今日はたくさん収穫あったなあ」

「誰にも言うなよ? いやマジで」

「何で一緒に入らなくなったの? 友達もそうだったから? それともイロイロ?」

「……いや」

空を見上げた。今日の夕焼けは赤みがない代わりに鮮やかなサー

モンピンク色をしていた。真っ赤な空が好きなのだが、こんな空も悪くはないと思う。

「姉ちゃんに好きな人ができてさ……。今もそうだけど、半身浴がダイエツトにいいって言われてたから。俺がいると半身浴なんてできないだろ？ ホラー番組見てめっちゃ怖くなくても、小五からは頑張って一人で入ってた」

「はっはーん。お姉ちゃん思いなんだ」

結局好きな人と結ばれずに、姉ちゃんは風呂で半身浴しているフリをしながら声を押し殺して泣いていた。本人はなにと言わないが、俺は知っている。

「それで、なんで仮病使ったの？」

「……………疲れると思ったから」

わあ正直に言っちゃった。右ストレートがとんでくるぞと身構える。…………でもいつまでたっても右ストレートはとんでこない。

「言ってくれたら帰ったのになあ」

「……………」

ちよつと罪悪感。

コンビニが見える。あそこで何か買ってやろうか。カルパスとかカルパスとかカルパスとか。この前後ろの席のヤツがカルパスのことをアルパカと言っていて嘖き出したことがある。

「んじゃあここでいいよ。じゃあねバイバイ」

「え、コンビニ寄らないか？ カルパス買ってやるぞ」

「いーよ」

後ろ姿を見せて走り去っていく。菜保が遠くなっていく。サーモンピンクの空。長い影。

明日カルパスを持って行ってやろう。ついでにスルメも。菜保は仮病の俺を一生懸命看病してくれたんだし。

「きゃっほう今日の晩御飯はくさやだあああ！」

菜保はスキップして高く跳び上がっていた。心の底から嬉しそうだった。

せめて電話してから 後編（後書き）

お姉ちゃん欲しい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2348r/>

そうつまり俺の彼女はオヤジなわけだが

2011年10月8日19時16分発行